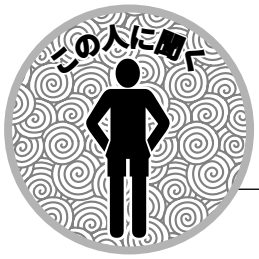

Q:研究は進んでいますか。

A:「理想布」の実現をめざす。

森技術事務所　所長・森　益一氏

―現在の活動内容をお聞かせください。
森＝58年間、尾州と共に繊維に関わってきました。繊維・染色が私の天職と考え、今も新商品創造にチャレンジする意気込みは変わりません。今は羊毛製品のプラズマ処理に関する研究や、王子ファイバーの技術顧問として抄繊糸の染色・仕上げのお手伝いもしています。
―プラズマ処理について説明して下さい。
森＝ご承知のように、合成繊維がこれだけ発展した今でも天然の羊毛には他にはない優れた特性があります。しかし唯一の欠点は洗濯機で洗えないことです。今まで羊毛の防縮加工は化学加工が主流でしたが、化学薬品も水も一切使わないプラズマ処理で羊毛をウォッシャブルにすることは、環境や安全の問題上、最も合理的な方法と考え、その仕事に全力を投じています。機械の販売と普及に努めるとともにプラズマで何故羊毛がウォッシャブルになるかそのメカニズムについて大学で勉強しています。
―KESの研究もされたと聞きますが今でも続けていますか。
森＝KESとは布の風合いを計測し数値で評価するシステムで、従来、染色・仕上げの関係は色柄、風合いなど殆ど官能評価で決められ、最もコミュニケーションが難しいこととされていましたが、20年ほど前にこのシステムが完成、実用化しました。今ではフルオートで布の風合いを測り、誰でも共通の数値で話し合うことができます。例えば布の総合風合い（THV）は5段階評価とし最も優れた5から1までに数値化でき非常に有効な織物の品質指針となっています。
―イタリアの生地がなぜ良いと考えていますか。
森＝イタリアの紳士服地と日本のものと比較したことがありますがTHVで言いますとイタリアの生地は4から5に近いものが多いのに日本の生地は平均して3．5が中心です。私は6年前、その違いの研究のために半年、ビエラに行って調査する機会を得ました。染色・仕上げの関係だけでも9つほどイタリアと日本の違いを見つけました。そのことは機会あるごとに報告してきましたが色々な事情もあって余り改善されていません。今、尾州が考えなければならないのは「本物造り」。そのための挑戦は迷う事無くすべきだと思います。勿論、その優秀性を数値で表し、消費者にも売り先にも判って貰える努力を惜しんではいけません。
―そのほかの開発について教えてください。
森＝毛織物のナチュラルストレッチ加工です。この加工は私が以前イタリアで勉強している時にイタリアの会社にその技術を紹介し、それが世界中で普及し、今でも続いています。先程の話で高いTHVを出すために適度に伸びることは非常に重要な要素でシワになりにくいことも関連があり、それが本物志向のイタリアに認められたと感じております。勿論これは織物の企画がストレッチバックなど耐久性の点からも重要な要素です。
―この先どんな新商品開発を考えていますか。
森＝私は今、2つの新しい加工を考えています。1つは尾州の非常に開発力のある会社と共に「理想布」の実現を考えています。それは単にTHV4以上と言うだけでなく、本来の天然羊毛の風合いと優れた7つの特性を失うことなくシワのよらないイージーケアーな生地を造ることで、すでにその試作が進んでおります。もう一つは私が殆ど手造りに近い形で発表してきた天然染色を中心にした試作品の量産化で、これもすでに2社ほどとの共同開発が始まっています。これは自然回帰とかJapan発とかいうこともあり、大手も興味を示しており、早急に実現したいと考えております。
―最後に研究者として産地に一言を。
森＝今、色々な形で尾州再生の企画が進んでいるように聞きますがやはり、「他力本願」でなく「自力本願」。自力で本気の挑戦をすればまだまだひらけると思います。